

『源平闘諍録』は五冊本で成立したか

早川厚一

一 はじめに

『源平闘諍録』（以下、闘諍録）は、現存五冊（卷一上・卷一下・卷五・卷八上・卷八下）の零本である。しかし、現存の闘諍録を読むと、必ずしも零本であるとは言いがたく、当初から五冊本で成立した可能性もあることを指摘した⁽¹⁾。さらに、徳川の医師今大路家が所蔵していた目録中に、「源平闘諍録 不足五冊 書本 一ノ上下 五 八ノ上下 斗」と記されることから、既に中世末期には、闘諍録は、現存と同じ五冊であったこと、その後、今大路家の衰退と共に同家を離れ、幕府紅葉山文庫に流れ着いた可能性があることが明らかになった⁽²⁾。故に、闘諍録は、かなりはやい段階から、五冊本であったことが分かる。

二 各巻の記事構成の概観

闘諍録のそれぞれの巻の記事構成の特徴を概観してみよう。その方法として、今回は、闘諍録に延慶本と盛衰記とを対照させる。特に、盛衰記は、巻立の記事構成が、一部闘諍録に近似していることが指摘

されている⁽³⁾。

次表は、闘諍録のそれぞれの巻が、延慶本と盛衰記の巻の、どの記事からどの記事にまで対応するかを示したものである。各巻を概観してみよう。

卷一上。序章から内裏炎上記事までをひとまとまりの記事群として捉えている点では、三本ともに違いはない。

卷二下。巻頭は明雲関連記事から始まる点、三本ともに変わらないが、巻末は、讃岐院追号・頼長への贈官贈位記事で終わる闘諍録、さらに簡略な記事だが、「四〇 彗星東方ニ出ル事」を加え、この後の世の不調を暗示させる形で終わる延慶本、「九 彗星出現」に加えて、「二〇 法皇三井准頂」「一一 住吉明神示現」「二二 法皇四天王寺准頂」までを記す盛衰記（延慶本は、盛衰記の一〇～二二までの記事を、卷三冒頭に記す）というように、若干異なる。

卷五。巻末は、闘諍録と延慶本が、東大寺再建の奉行に行隆が選任された記事で終わる点同じなのに対し、盛衰記は、卷二十四の巻末を「仏法破滅」で締め括り、行隆関連記事を卷二十五の巻頭に置く。一方、闘諍録卷五の巻頭記事は、延慶本・盛衰記のいずれの記事におい

闘諍録	延慶本	盛衰記
<p>卷一上 一自桓武天皇平家之一胤事 二禁中洛中炎上事</p>	<p>卷一 一平家先祖之事 四〇京中多焼失スル事</p>	<p>卷一〇卷四 一平家繁昌(卷二) 一七大極殿焼失(卷四)</p>
<p>卷一下 一天台座主明雲大僧正被止公上事 二〇宇治悪左府贈官事</p>	<p>卷二 一天台座主明雲僧正被止公上事 三九三条院ノ御事</p>	<p>卷五〇卷八 一座主流罪(卷五) 八字治左府贈官(卷八)</p>
<p>卷五 一兵衛佐催坂東勢事 一四東大興福造宮沙汰事</p>	<p>卷五 一九上総介弘経佐殿ノ許へ参ル事 四〇南都ヲ焼払事</p>	<p>卷二二〇卷二五 七大場早馬立(卷二二) 一大仏造宮奉行勸進(卷二五)</p>
<p>卷八上 一行家義仲自宇治瀬田入洛事 一七木曾於瀬田被討事</p>	<p>卷七〇卷九 三四法皇天台山ニ登御坐事(卷七) 一一師家撰政ヲ被止給事(卷九)</p>	<p>卷三二〇卷三五 七義仲行家京入(卷三二) 一二兼光被誅(卷三五)</p>
<p>卷八下 一義経為平家征伐西国下向之事 一三維盛熊野参詣事</p>	<p>卷九〇卷一一 一二義仲等頸渡事(卷九) 一判官為平家追討西国へ下事(卷一一)</p>	<p>卷三六〇卷四一 一一谷城構(卷三六) 一四範頼西海道下向(卷四一)</p>

ても、巻の途中から始まる特異な形。

巻八上。闘諍録は、巻頭を、北陸合戦で勝利した義仲・行家等の入洛記事から始める。その点、延慶本は、義仲等の入洛記事を巻七の巻末に置き、巻八の巻頭は、「一 高倉院第四宮可位付給之由事」から始める。また、闘諍録の巻末は、義仲の最期とその家臣樋口兼光の助命・梟首記事で締め括られる。巻頭と巻末の記事構成から見れば、闘

諍録の巻八上は、義仲の入京から滅亡までを描いた巻と見て良からう。その点、延慶本は、義仲関連記事を巻七の終わりから巻九の三分の一程にかけて記すのに対し、盛衰記は、巻三十五の巻末を、闘諍録と同じく「兼光被誅」で締め括る点注目される。

巻八下。義仲討伐後、平家追討の命を受け、義経が西国下向した記事から始まる。一谷・生田の森合戦記事が中心で、その後、重衡・維

盛閑連記事に続けて、一谷から西国に落ちた平家追討のため、範頼と義経軍が発向した記事で締め括られる。延慶本では、卷九半ばから卷十一冒頭に相当する。また、盛衰記では、卷三十六冒頭から卷四十一半ばまでの記事に相当する。盛衰記は、義経の西国下向記事を、卷三十六の「一一 福原忌日」の中に記すものの、卷三十五を義仲主従討滅閑連記事で締め括り、卷三十六の冒頭を「一谷城構」で始める点注意される。

闘諍録の卷一上・下の記事構成は、十二巻本『平家物語』の記事構成にほぼ一致しているのに対し、卷五・卷八上・卷八下の記事構成は、一部を除いて他諸本にも見られない特異なものであることが確認できよう。

三 記事量から見る各巻の特異性

次に、闘諍録の、各巻の記事量の多寡をしてみる。その際、延慶本と盛衰記との記事量も示す。二本の記事量を比較することにより、闘諍録の問題点が抽出できるのではないかと考える。なお、各諸本の総頁数は、現在公刊されている次の影印本・翻刻本による。

闘諍録 『内閣文庫蔵源平闘諍録』和泉書院一九八〇・２
 延慶本 『延慶本平家物語 本文篇(上・下)』勉誠社一九九〇・６
 盛衰記 『源平盛衰記(慶長古活字版)(一〜八)』勉誠社一九七七・
 10〜一九七八・８

闘諍録の卷一上・卷一下・卷五・卷八上・卷八下に付した数字や、闘諍録のそれぞれの巻に該当する延慶本・盛衰記に付した数字は、そ

	闘諍録	延慶本	盛衰記
卷一上	七三	八八・五	二四五
卷一下	七三	一〇一	二〇六
卷二		(三〇〇)	(八四〇)
卷三		←	←
卷四		〈二〇〇〉	〈二八〇〉
卷五	五三・一	三七	一二五・五
卷六		(二九一)	(四一一)
卷七		〈九五・五〉←	〈二〇六〉←
卷八上	六一・五	一一三	二七七
卷八下	七一・六	一三三	三四五
残り頁		一七四	四三六

れぞれの巻の該当記事の総頁数を示す。また、卷二〜卷四、卷六・卷七の()中の数字は、それぞれの諸本の複数巻にわたる総頁数を示したもので、へん中の数字は、一巻辺りの頁数を示したものである。それによれば、延慶本では一巻あたり九七頁ほどとなり、盛衰記では同様に二四三頁あたりになる(卷一上・卷一下・卷一〜卷四、卷六・卷七の総頁数を七で割った数)。これによれば、闘諍録の卷一下と卷五との間には、卷一・卷三・卷四の三巻を置くのが妥当であり、同様に卷五と卷八上との間にも卷六と卷七の二巻を置くのが妥当であろう。故に、その間には、卷一や卷八に見るように、上・下に分かれたれた巻は存在しがたいことなるう。また、卷八下以降、物語の最終巻までの総頁数を数えると、延慶本の場合は一七四頁、盛衰記の場合

四三六頁となるが、卷一上から卷七までのあり方から残りの巻を推測すれば、卷八下以降には、二卷分（卷九・卷十）の記事があると考えられよう。

以上からすれば、鬪諍録は十巻本の形態を取るものの、実質的には、十二巻形態の本文をもとに、それにかなり大きな改変を加えてできなかった『平家物語』諸本の一つと考えられる。その内特に大きな改変が加えられた巻としては、右表にも見るように、他の巻と比べてもかなりいびつな数字を示す、巻五と卷八下の二巻であろう。具体的に記してみれば、鬪諍録の巻五相当巻の延慶本・盛衰記では、共に異常に記事量が少ないことから、鬪諍録の巻五には独自増補記事がかなりあるだろうことが予測されるし、卷八下においても、該当巻の延慶本・盛衰記では、共に記事量がかなり膨れあがっていることから、大きな改編が施されているだろうことが予測される。

ではそうした改変がどのような意図に基づいたものであるのか、そのことをも含めた各巻の具体的な検討は、次章以降で扱うことにする。

四 卷一上の特性

先ず初めに、卷一上の目録を示す。その内、鬪諍録の特異記事（必ずしも独自記事とは限らず、鬪諍録の特性をよく示す記事を言う）を（一）中に記す。また、諸本の多くに見られる記事の内、鬪諍録が欠く記事を、【】中に記した。

- 1 自桓武天皇平家之一胤事 a（坂東平氏系譜）
- 2 備前守忠盛昇殿事

- 3 忠盛死去後清盛繼其跡栄事
 - 4 内与院御中不和之事
 - 5 二条院恋先朝后宫御事
 - 6 二条院崩御事
 - 7 延暦興福寺額打論事
 - 8 高倉天皇御即位事
 - 9（右兵衛佐頼朝嫁伊東之三女事）
 - 10（頼朝子息千鶴御前被失事）
 - 11（頼朝嫁北条嫡女事）
 - 12（藤九郎盛長夢物語）
 - 13 大政入道清盛悪行始事
 - 14 大政入道第二御娘有人内事
 - 15 新大納言成親為大将所望様々之祈禱事
 - 16 成親俊寛平家追討僉議之事
 - 17 目代師高白山与大衆起争事
 - 18 山門大衆捧神輿下洛事 付 頼政射変化物事
 - 19 平大納言時忠預清撰事
 - 20 加賀守師高尾張国被流事
 - 21 禁中洛中炎上事
- 諸本に見る主要記事の内、鬪諍録が欠くと考えられる記事は、特に見あたらない。一方、卷一上の特異記事は、1の記事に含まれる「坂東平氏系譜」と、9、12の頼朝伊豆流離譚であろう。
- 先ず、1 a「坂東平氏系譜」については、巻五「八 上総介与頼朝中違事」と照応関係にあることが、渥美かをるにより指摘されている。

る。⁵⁾ 頼朝拳兵に際して、坂東平氏や、その中でも取り分け千葉一族の貢献ぶりを明らかにするために、巻一上に、「坂東平氏系譜」の記載が必要とされたのであろう。⁶⁾ もう一つの「頼朝伊豆流離譚」については、鬪諍録以外では、延慶本が、巻四の巻末に、盛衰記が、巻十八の巻頭に同様の話を載せる。いずれも頼朝拳兵譚に接続する形で記すように、もともとこの話は、頼朝拳兵譚を含む巻四にあった話と推測できる。それを、仁安三年(一一六八)の頃の話として、「吾身榮華」と「殿下乗合」との間に取り込んだと考えられる。鬪諍録が、巻四該当巻を欠くことと関わる可能性が考えられる。

五 巻二下の特性

巻二下の目録を次に示す。凡例は、巻一上に同じ。

- 1 天台座主明雲大僧止被止公上事
- 2 宮成天台座主事
- 3 (明雲可被行罪科宣旨状)
- 4 (山門大衆奏聞状 并送副入道相国方之状)
- 5 明雲罪過被定輕重僉議
- 6 明雲合還俗被流事
- 7 山大衆僉義奪返明雲僧止事 a (快俊堅者の弁舌)
- 8 山大衆依奉留明雲法皇有逆鱗依之(大衆重遣状相国方)
- 9 行綱仲言事 a (山門大衆の清盛への仲介依頼状)
- 10 相国奏謀叛事 并新大納言被召取事

11 西光法師被召捕事……簡略

12 重盛卿被諫父相国事

13 欲奉流法皇之間重(盛卿)奉諫父事

14 重盛被召兵者事 并褒姒后譬喩

15 成親卿等返宿所事 并少将被捕事

16 門脇殿被請受於成経事

17 成親卿被流事

18 成経康頼俊寛被流鬼海嶋事 康頼於嶋造千本率都婆

a 【康頼祝言】 b 【蘇武】

19 讚岐院追号事

20 宇治悪左府贈官事

主要記事の内、簡略になっていたり、記事そのものを欠くと考えられるものとしては、11や18のa「康頼祝言」b「蘇武」が目につく程度である。一方、鬪諍録の特異記事としては、3の「明雲可被行罪科宣旨状」と、4・7 a・8 aの四箇所程度。この内、鬪諍録の独自記事は、4の内の「清盛に宛てた山門大衆の書状」と、8 a「山門大衆の清盛への仲介依頼状」の記事。4の「山門の大衆の奏聞の状」は、盛衰記にも見られ、7 a「快俊堅者の弁舌」も、次に見るように、「快俊」の名は鬪諍録は「祐慶」となっているものの、盛衰記の記事にかなり近いことが確認できる。

鬪諍録

・爰快俊堅者申悪僧、三枚胃指左右鞆、着萌葱絲威腹卷付袖、大長刀

脇挟、大衆中進出。彼堅者非秀悪僧一道、俱舍成実外、至天台真言

深窮奥義、詩譚管絃又為違者。然此快俊進出言、情思事情、自当山

創草以来、送數百歳之星霜、貫主代々相続、彼一箱中被注置其名。敢非人智所及。偏山王大師御計也。忝汲四明之流達三密之奧義程人、不糺実否立所被行重科（給）事、乍云末世習非心憂次第哉。且為朝家御師範、且為諸僧長老。誰人不歎何類不訪。神明垂哀三宝争不照覽哉。若今度沈流罪給、以後又可惡。所詮、早可有皈山也言（七ウ）（八オ）

盛衰記

・西塔法師ニ戒淨坊相摸阿蘭梨祐慶ハ、三塔無双ノ惡僧也。此僧ハ本園城寺ノ衆徒ニテ、ヨキ学匠也ケリ。俱舎、成実ノ性相ヨリ、法相、天台ノ深義ヲ極メ、顯密両宗ニ亘テ三院三井ノ法灯也ケルガ、大慢偏執ノ者ニテ我執強キ僧也。我寺山徒ノ為ニアザムカル、事、生々世々ノ遺恨ニ思ケルガ、妄念晴レ難ク覺テ、ヨシ／＼此寺ニアレバコソ此思モアレ、不如山門ニ移住センニハト変改シテ、住馴シ三井ノ流ヲ打捨テ、西塔院ヘソ渡リニケル。本ヨリ心立タル者ナレバ、三枚甲ヲ居頸ニ著ナシ、黒皮威ノ大荒目ノ冑ニ、三尺ノ大長刀ノ茅ノ葉ノ如ナル杖ニ突テ、衆徒ノ中ニ進入テ申ケルハ、傳事ノ心ヲ案ズルニ、当山建立以後數百歳ノ星霜ヲ送、貫首代々相続テ、忝顯密ノ教法ヲ弘通シ給ヘリ、四明ノ法灯一天之戒珠ニ御座ス、而モ姦臣ノ讒訴ニ依テ実否糺サレズ、重科ニ被行給ハン事、末代ト云ナガラ心憂次第ニ非ヤ、且ハ朝家ノ師範、且ハ山門ノ官長ニ御座、誰人カ歎訪ヒ奉ラザラン、今度流罪ニ沈給ハンニ於テハ、衆徒何ノ面目有テカ当山ニ可止跡、イツクマデモ御供ヲコソ被申メトテ（一二九九）（三〇二頁）

傍線部から、当該記事に関しても、闘諍録と盛衰記との間に何らか

の関係があることは確かであろう。また、4の内の「清盛に宛てた山門大衆の書状」や、8 a 「山門大衆の清盛への仲介依頼状」の独自記事についても、闘諍録編者がそれらの書状を捜し出し取り込んだとする必然性も考えたいことから、それらの記事は、闘諍録がもととした『平家物語』に、既にあつた可能性が濃いと考えられるが、闘諍録編者には、書状に対する強いこだわりがあるようで、この後にも、巻五の12、巻八上の12「山陽・南海諸国の押領使に宛てた院庁下文」などが取り込まれていて注意される。

六 巻五の特性

巻五の目録を次に示す。凡例は、巻一上と同じ。

- 1 兵衛佐催坂東勢事
- 2 (加曾利冠者与千田判官代親正合戦事)
- 3 (妙見大菩薩之本地事)
- 4 頼朝聳大勢向富士河軍事
 - a (重忠降陣記事以前までは、闘諍録の独自記事)
- 5 権亮維盛於討手使東国下向事
 - a 【新院殿島御幸】
- 6 義経於浮嶋原成副將軍事
 - a (頼朝、東国平定の後に関西にとの諫言に従う)
 - b (伊東祐親自害、子息九郎平家へ)
 - c (頼朝の本妻の祐親三女、常胤の次男師常の妻に)
- 7 (佐竹太郎忠義被生取梶原事)
- 8 上総介与頼朝中違事
 - a (広常と頼朝との確執記事等)

- 9 山門奏状事
- 10 都還事
- 11 近江源氏被責落事
- 12 南都之牒状事
- 13 南都之炎上事
- 14 東大・興福造宮沙汰事
- b 【大賞会延引事】
- a 【希義被誅】
- b 【河野通清被誅】
- 諸本は、南都返牒を、卷四当該部に置く
- 頼朝拳兵譚の前半部分とも言える、「山木討」「石橋山合戦」「小壺坂合戦」「衣笠城合戦」「安房国落」までの記事は含まず、石橋山合戦で敗退し、安房に上陸した頼朝を、先陣を望む広常の言を遮り、千葉常胤が下総までの先導を果たす記事から始まる。千葉氏を嫡流とする坂東平氏の平家物語である闘諍録にとって、最も相応しい形で、卷五は始まる。『吾妻鏡』によれば、治承四年（一一八〇）九月十三日に、頼朝は安房から上総に出ている。従う軍兵は三百余騎に及んだという。しかし、上総に参集するはずだった広常は兵を集めるため遅れ、常胤も馳せつけようとしたが、下総目代の襲撃が心配されたため、下総から動けなかった。頼朝が、広常の参上を待たず下総に向かったのが、九月十七日のこと。それから二日遅れて、広常は上総の軍勢二万騎を率いて、隅田川のあたりに参上したという。に対して、闘諍録では、九月四日、頼朝が、上総から下総に発向した時、五千余騎の兵が従っていたという。その内、広常勢は、一千余騎、常胤の勢は三百余騎であった。常胤・広常は、安房に上陸した頼朝と、早くから行動を共にしていたとするのだろうか。その常胤が、下総への発向に際して、自軍

の三百余騎を先頭に、五千余騎の先陣をつとめたとするのである。頼朝拳兵譚という側面から見れば、安房国落ち後から記す現存の卷五は、卷五下と、安房国落ちまでを記す前半部分は、卷五上と巻立てされても良いはずだが、そのような巻立をせず、あくまでも卷五としか記さないのは、千葉一族を中心とした頼朝拳兵譚を記そうとするためだろう。その意味からすれば、闘諍録には、卷四に書かれるはずの頼朝拳兵譚の前半部分は必ずしも必要とされないとも考えられよう。

続く2「加曾利冠者与千田判官代親正合戦事」では、常胤の孫成胤が率いる七騎と、平家の方人千田親正率いる一千余騎とが戦っていた時に、妙見の化身である童が現れ、成胤に味方したという。3「妙見大菩薩之本地事」では、その妙見と千葉氏との関係について、常胤が、頼朝の問いに答える形で記される。その記事の中で注目されるのは、妙見の譲渡を請う頼朝に対して、常胤が、自分が参向した以上、妙見は頼朝をも加護するであろうと言う場面である。妙見の加護により、頼朝の勝利が約束され、この後の千葉一族の貢献ぶりが期待される一節であると言える。

次の4の独自記事aでは、頼朝の武蔵入国、それに際して常胤の尽力があったこと、梶原景時の参陣が記される。続いて6aでは、頼朝が平家追討の前に東国を平定せよとの諫言に従ったとする記事、この記事は、この後の7佐竹太郎忠義の生捕り話の伏線となっている。続く6のb・cは、卷一上の9「右兵衛佐頼朝嫁伊東之三女事」、10「頼朝子息千鶴御前被失事」の後日譚となっておりと同時に、頼朝の本妻であった祐親の三女が、常胤の次男師常の妻になったとする闘諍録独自の千葉伝承をここにも留めていることが注目されよう。次の8a

では、秀衡追討の件で、広常が頼朝を悪口し、五千騎諸其上総に帰ったとするが、確執の理由に関わる記事は、卷一上巻頭の坂東平氏系譜中に記された記事と照応関係にある⁸⁾。また、闘諍録は、諸本が5に該当する記事内に記す「新院嚴島御幸」記事を欠くが、8の記事中に、新院の安芸国からの還御記事があることから、「新院嚴島御幸」記事は、闘諍録では、略述されていることが明らかとなる。

今一つ、巻五の記事で注目すべきは、12の南都の返牒記事である。この返牒については、既に拙稿⁹⁾に触れているため、詳細はその論に譲るが、略述すれば、次のようになる。

清盛が南都攻撃するに至った二つの理由の内の一つとして、以仁王の乱の折、三井寺から南都に出された牒状に対する返牒にあった文面に、清盛が腹を立てたためとする。諸本もそのことを巻五の当該部に記すが、闘諍録は、この巻五の記事に、返牒本文そのものを引く。しかし、返牒は、他本のように、「三井寺から延暦寺への牒状」「三井寺から興福寺への牒状」、それに対する「興福寺から三井寺への返牒」という三点セットで巻四当該部に置かれてあるべきものである。それを闘諍録は、返牒のみを巻五に取り込んでいたのである。だからといって、闘諍録に巻四を想定した場合、同じ返牒記事を重複して記していたとは考えがたいし、かと言って、三井寺の牒状に対して、南都から出された返牒にこの巻四当該部で触れないわけにはいかないだろう。この後、延暦寺が離反したことにより、以仁王が、三井寺から興福寺に落ち延びることになった事情を語るためには、不可欠の記事だからである。とすれば、闘諍録には、巻四は当初からなかった可能性が浮上してこよう。巻四が構想されなかったことにより、巻四にあっ

た頼朝流離譚は先に見たように巻一上に移され、巻四の南都返牒は巻五に移された可能性を考えるべきだろう。福田豊彦氏も、私の論には直接触れないが、当該箇所語釈で、『闘諍録』が拠った『平家物語』もこれらの諸本（早川注。四部本・延慶本・長門本・盛衰記・寛一本等）と同様に、以仁王挙兵の段に三井寺の牒とこの興福寺の返牒、及び興福寺の東大寺に対する牒を収録していたと考えられる。とすればここに移したのは『闘諍録』作者であろうから、あるいは本書の巻第四は後世の欠失ではなく、当初から作られなかったのかも知れない（『全注釈源平闘諍録』下―一六六頁）と、私と同様の判断をされている。

七 卷八上の特性

卷八上の目録を次に示す。凡例は、卷一上に同じ。

- 1 行家義仲自宇治瀬田入洛事
- 2 法皇自天台山成還御事
- 3 義仲行家任官事
- 4 維高維仁親王位諍事
- 5 平家人々筑紫被建内裏事
- 6 使康貞頼朝給院宣事
- 7 緒方三郎維能鎮筑紫事 附 先祖謂
- 8 奉始主上平家宇佐宮參詣事
- 9 平家緒方三郎被追出筑紫渡四国給事
- 10 木曾於京都院參出仕頑事
- 11 木曾平家為追討申院宣事

- 12 室山水嶋合戦事
- a (山陽・南海諸国の押領使に宛てた院庁下文)
- b (福原の知盛、屋島への献策)
- 13 木曾於京都致狼藉事
- a【源威人仲兼譚】
- b【修憲出家して法皇に面会、明雲等の死を話す】
- c【公朝等関東に下向し、頼朝に報告】
- d【義仲、平家に講和の内書を送る】
- e【前入道殿下基房、義仲に説諭】
- f【法皇、五条内裏より業忠の宿所へ】
- 14 為木曾追討義経範頼被向瀬田宇治事
- a (北面下臈季俊下向し、頼朝に報告)
- b (範頼麾下の侍大將軍として常胤一族)
- 15 高綱宇治河先陣事
- a (大手瀬田での、一条忠頼と今井兼平の言葉争い)
- 16 義経畠山院参事
- 17 木曾於瀬田被討事
- a (恩田宗春と伴絵との戦い)
- b (秋野五郎季光の奮戦)
- c【義仲等の首渡し】
- 卷八上は、1と17との照応関係に見るように、入京した義仲とその郎等達の興亡を描こうとする巻と考えて良いであろう。具体的には、13から14にかけての記事を分析して、内表においても義仲の興亡物語として再編されていることを明らかにした。¹⁰⁾ また独自記事の中で、特筆すべき記事の一つとして、短い記事だが14 bを挙げるべきだろう。

範頼麾下の侍大將軍の名寄せの中に、千葉一族の人々の名が記されている(『平家物語』諸本の中では、他に盛衰記にも記される)。『平家物語』諸本においても鬭諍録の卷八上においても、千葉一族の活躍が義仲追討譚の中で特筆されているわけではないが、千葉氏が、義仲追討軍の大手、それも侍大將の筆頭に記されることにより、義仲追討譚における千葉氏の存在の大きさを印象づけることになっていると言えよう。他に、11話中に見る院庁下文も注意される。卷一下の3・4に見るように、鬭諍録にことさらに書状が取り込まれることの意味が考えられねばならないだろう。また、15に見る忠頼関連話なども注目される。さらに、17 bもその内の一つだが、鬭諍録には、卷八上と卷八下に集中して、南都本的本文の流入が少なからず認められる。¹¹⁾ 新たな本文の挿入並びに改変、及び省略等、卷八上には、巻の半ば以降にかなりの手が入られていることに気付く。

八 卷八下の特性

卷八下の目録を次に示す。凡例は、卷一上に同じ。

- 1 義経為平家征伐西国下向之事
- 2 一谷生田森合戦之事
- a【梶井宮承仁法親王と都の全真との交流】
- b【田代冠者为綱のこと】
- c (特異な敦盛・忠度討たれ記事)
- 3 熊替大夫成(篤歟)盛討事
- a (他本の敦盛譚を成盛譚とする点)

- 4 備中守船清九郎兵衛踏還事
- 5 後藤兵衛落事
- 6 本三位中将梶原被生取事
- 7 越前三位通盛被討事
- 8 小宰相局被投身事
- 9 卿相頸被懸獄門木事
- 10 重衡請源空被持戒事(後)
- 11 重衡内裏女房奉呼事(前)
- 12 重衡関東下向之事
- 13 惟盛熊野参詣事(付 那智温(池敷) 被投身事)
- a (通盛の侍、主の討たれるのを藪に隠れて見る)
- b 【落ち行く平家の船の様子】
- a 【通盛と小宰相との馴れ初め譚】
- a 【維盛の北の方平家の頸見せに遣る事】
- a 【重衡の使が平家へもたらした院宣】
- a (侍従のことを問う重衡に、景時答える)
- b 【千手】
- a 【横笛】
- b 【観賢説話】
- c 【那智籠の山臥維盛を見知る事】
- d 【維盛こそ日本国の大將軍・出家の功德】
- e 【武里屋島へ報告】
- f 【頼朝正四位】

- g 【崇徳院遷宮】
- h 【頼盛関東下向】
- i 【頼盛鎌倉到着】
- j 【頼盛上洛】
- k 【三日平氏】
- l 【維盛北の方歎き】
- m 【平家屋島歎き】
- n 【新帝即位】
- o 【義経・範頼任官】
- p (景時、義経に屋島攻めを提案)
- q (鎌倉より、常胤等、義経麾下の兵として派遣)

卷八下の1が、義経の平家討伐記事から始まるのは、卷八上が、義仲主従の討伐記事で終わるためである。盛衰記も、二章で見たように、同様の巻立ての構成を取っている点注意される。次の2「一谷生田森合戦之事」は、いずれの諸本も多くの合戦話から構成されているが、卷八下の後半の記事群に見るような大きな違いはない。その中で注意すべき点は、2・3に見る盛俊・敦盛・成盛話である。これらの話では、その討手である猪俣小平六則綱・皆輪次郎・熊谷直実の視点から、平家公達の最期を描こうとしている。つまり、闘諍録の一谷合戦話の多くが、関東で成立した物語にふさわしく、源氏の側に視点を据えて源平の物語を語ろうとしているのである。また平家の武将の盛俊や清九郎兵衛を卑小化し、その場面を戯画化しようとする傾向も指摘できる。あるいは、敦盛と業盛話では、両者の名を取り違えたかのような話になっている。また忠度話では、討手の岡部六矢太にも、討

たれた忠度の何れにも特に興味を示すことなく、忠度が岡部に討たれたことのみを記し、話の興味は、忠度の骸を、かつて情ある言葉をかかれたある辻堂の住持の僧が捜し出し、葬送を営み、種々の孝養をしたとすることの方にあるかのような特異な話になっている点注意される⁽¹²⁾。

また、巻八下においても、巻五4 a に見る景時像と同様に、他本には見られない特異な景時像が、6 a・12 a・13 p などに見られる。6 a では、景時は、生け捕った重衡に対して、「何かに捨れ鉢の侍をば召し具せられ候ひけるぞ。景時が様に候はむ者を召し具せられ候はんは、此れ程の事候はじ」(二〇オ)と辱めたという。「どうして主を見捨てて逃げるような侍をあなたは召し連れておられたのか。私のような者をお召し連れになったのならば、こうした事態はありますまい」と言ったとする。続く7 a でも、通盛の侍勲太瀧口時員は、一端は防ぎ矢を射て通盛を逃がそうとしたが、私の亡き後小宰相を都へ送れとの通盛の言に、「流石に命も惜しければ、藪の中へぞ入」(二一オ)り、通盛が佐々木三郎盛綱に討たれるのを見ていたとする。この両話には、主をも見捨て、逃げる平家の侍、乳母子達の醜態が意識的に描き出されているとも言えよう。と同時に、鬪諍録では、傍線部に見るように、景時の口を借りて、景時自らを称揚する台詞にもなっている。その中でも、景時がかなり好意的に描かれている13 p の記事が注意される。屋島攻めを前に、景時は義経に次のように進言する。

・梶原平三景時、竊かに九郎判官の許に参向して申しけるは、「三河守殿大將軍と為ては、年月を経と雖も、更に平家を迫め落とすべからず。君は次將、吾等は末將なり。数万騎の軍兵を以て八島の館に

押し寄せ、谷ぎ平家を打ち落とさん」と申しければ、義経言ひけるは、「鎌倉殿より大將軍の仰せを蒙らざれば、争でか兄三河守を越えて八島を迫むべきや。其の儀有らば、汝の子息一人関東へ差し下し、事の子細を申さるべし」(二六ハウ〜三七オ)。

兄頼朝の意向を無視し、独断的に屋島攻めを図ろうとする義経、そうした義経の行動に頼朝の眼代として掣肘を加えようとする景時というのが、『平家物語』諸本に見られる図式だが、鬪諍録には、それは正反対の義経・景時像が見られる。屋島攻めを主張する景時に対して、頼朝の意向を尊重し、頼朝から大將軍の仰せを蒙らない以上は、範頼を差し越えてどうして屋島を攻めることなどできようかと、兄の頼朝と範頼の思いを気にする義経像が見られる。その義経の意向を受け、景時の甥生田次郎景幹が頼朝のもとに遣わされ、「範頼合戦の道を延引せしめければ、自今以後に於いては、九郎冠者を大將軍と為よ」との頼朝の敕命が下されたという。このように、鬪諍録に描かれる義経と景時との間に対立はなく、鬪諍録には、この後、逆櫓論争記事さえ構想されていなかった可能性が浮かび上がるのではなからうか。

最後に巻八下で注意すべきは、12 b から、13 a o に見るように、鬪諍録は他諸本に見る多くの記事を欠いていることである。鬪諍録は、これらの記事を省略したと考えられる。これらの記事は約半年余りにわたる記事であるが、省略した結果生じる半年余りの空白を補うために、巻八下の巻末記事に当たる範頼の西国への進発を、他諸本に比べ半年余り早め、三月二十九日のこととした可能性があることを指摘した⁽¹³⁾。故に鬪諍録では、三月二十九日数万騎を率いて進発した範頼

は、西国へ向かったものの何もなすことなく、室・高砂に留まって、遊女を集め、半年以上もの間遊び戯れていたかのように記されることになる。先に引いた13 pは、そうした状況を見かねた景時が、屋島の平家討伐を義経に進言したことになる。このように、闘諍録は、本来あつたはずの多くの記事を省略し、鎌倉から頼朝によって差し遣わされた西国攻めに当たる義経麾下の兵の名寄せ記事で終わる。こうした巻八下の終わり方について、私は、「新たな物語をつむぎ出す可能性のある多くの記事を削り取り、物語の終息に向かって物語を整理し直した痕跡として、闘諍録の巻八下の最終記事部分を指摘できるのではないか」(一七頁)と考えた¹⁶⁾。こうした私の見解に対して、高山利弘は、他諸本では常胤一族を大手範頼麾下の兵とするのに対し、闘諍録が義経麾下の兵とすることに着目し、妙見大菩薩を相伝する千葉氏の嫡流常胤が義経に従軍することは、この後に続く屋島・壇ノ浦合戦の勝利を意味することになり、当然この後に屋島・壇ノ浦合戦の勝利を得るまでの展開が想定されるのではないかとした¹⁷⁾。私は、高山氏が着目したその事こそが、逆に闘諍録が物語全体の終息を意図していたことを意味すると考える。常胤一族が大手に付こうが搦手に付こうが、頼朝に仕えていることには違いがなく、妙見大菩薩の加護が期待できることについては変わりがない。むしろここで注意すべきことは、諸本や『吾妻鏡』(元暦二年正月二十六日条)が、範頼麾下の勢揃え記事として引くものを、闘諍録が義経麾下の勢揃え記事として転用することの意味である。ここでは先ず、兄頼朝の信任を得て、範頼に代わり(大手の?)大將軍として屋島に進発したとされる特異な義経像に注目すべきであろう。今一つは、巻八上の14 bに指摘したが、範頼

麾下の侍大將軍の名寄せの筆頭に、常胤一族の名が加筆されていたように、この巻八下においても、常胤一族に対する特別な配慮が加えられているのではないかという点である。常胤一族へのそうした配慮が加えられた理由としては、一谷合戦以後の範頼が、先にも見たように大軍を率いて西下したものの、遊君や遊女と戯れるばかりで、なすことなく空しく日を過ごしていたと『平家物語』諸本で描かれることと関わるのではなからうか。その範頼麾下に、『吾妻鏡』や『平家物語』諸本によれば、常胤一族は属していたのである。そんな事情が、闘諍録では、常胤一族を義経麾下の兵とさせることになったのであろう。といって、『吾妻鏡』や『平家物語』諸本を見ても、この後に、常胤一族が、屋島合戦でも壇ノ浦合戦でも特に活躍したわけでもなさそうである。故に、闘諍録に、巻八下以降の記事があつたとしても、千葉一族の活躍する具体的な合戦譚は想定しがたいのではなからうか。闘諍録編者にもそうした話の手持ちはなかつたと考えられる。そこで、闘諍録では、常胤一族が義経麾下に配属されたかのように記すことにより、妙見大菩薩の加護のもと、屋島合戦や壇ノ浦合戦で常胤一族が武名を高めたことを仄めかす形で物語全体の幕を閉じようとしたのではなからうか。このように考えれば、闘諍録において、巻八下以降の展開は考えがたいことにならう。

九 まとめ

本論で検討したことは、以下のとおりである。

一 闘諍録の巻立から見た場合、巻一上・下については、延慶本・盛

衰記と比べても大きな違いはない。その点巻五の巻頭は、頼朝の安房落ち以降から始めるといふ特異な形を取る。巻五の巻頭を除けば、巻一上・下の巻頭、巻一上・下、巻五の巻末のあり方は、他本と大きな違いはないが、巻八上・下は、巻頭・巻末ともに特異な形を示す。その中で、巻八上の巻末、巻八下の巻頭のあり方が、盛衰記に一致している点注意される。

二 鬪諍録は、十巻本の形態を取るものの、実質的には、十二巻形態の本文にかなりの改変を加えてできた『平家物語』諸本の一つと考えられる。その中でも、特に巻五と巻八下にかなり大きな改変の手が加えられていると考えられる。

三 巻一上の特色は、一つは坂東平氏やその中でも千葉一族の貢献ぶりを記すために記された「坂東平氏系譜」と、雌伏時代の頼朝を記す「頼朝伊豆流離譚」であろう。もともと巻四にあった「頼朝伊豆流離譚」が、巻一上に取り込まれたのは、鬪諍録が、巻四該当巻を欠くことと関わる可能性があるとも考えられる。

四 巻一下では、特異記事の内、3・4・8に見る書状が注目される。源平の鬪諍に格別関わりがあるとも思われない書状が、鬪諍録になぜ必要とされたのか。鬪諍録には、この他に、巻五の12、巻八上の12と言うように、他の巻から書状を取り込んだり、新たな書状を増補している例もある。その一部は、盛衰記との関係から理解できるものもあるが、総てがそうとも考えられず、今後の課題となる。

五 僅か三百余騎の常胤が、先導を主張する広常の言を退け、五千余騎の先頭に立って、安房に上陸した頼朝を下総まで率いたという記

事から巻五は始まる。そうした巻五開巻のあり方は、千葉一族を中心とした頼朝拳兵譚という側面を持つ鬪諍録(巻五に限ってみても、2・3・6 C等の記事が該当)にとっては、千葉一族の登場しない安房落ち以前の頼朝拳兵譚は必要とされなかった故に可能であったとも考えられよう。

六 本来巻四にあるべき「南都返牒」が、鬪諍録では巻五に記される。その返牒にあった文面に清盛が腹を立て南都攻撃をすることになったとして全文を引くのだが、こうした形で返牒が巻五に引かれるのは、鬪諍録に巻四が当初から構想されていなかったためかと考えられる。

七 巻八上は、入京した義仲とその郎等達の興亡を描く巻と言えよう。それにふさわしく、巻の後半においては、記事が増補改変され、略述されたりしている。その中で、特に活躍の見られるわけでもない千葉常胤一族の人々の名が、義仲追討軍の大手、それも侍大将の筆頭に記されている点が注目される。義仲追討譚における千葉氏の存在の大きさを印象づけることになっていると言えよう。

八 巻八下の一谷合戦話では、関東で成立した平家物語にふさわしく、平家公達の最期が、討手である源氏武将の視点から描かれていたり、平家武将の盛俊等の最期が卑小化、あるいは戯画化して描かれている。

九 兄頼朝の意向に逆らう義経、一方そうした義経を讒言し、義経と頼朝との仲を裂く役回りを演ずる景時と言う図式が鬪諍録には見られない。鬪諍録では、むしろ正反對の義経・景時像が見られる。

義経は兄頼朝の意向を尊重し、ついには頼朝の信任を得て、兄範頼

に代わり大將軍に任命されたとする。また、義経を補佐する景時にも好意的な視線が注がれている。とすれば、この後、闘諍録には、逆櫓論争、さらには頼朝と義経との確執さえ構想されていなかった可能性があろう。

一〇 頼朝の信任を得た義経は、範頼に代わり大將軍となったが、その義経のもとに鎌倉から多くの武士が遣わされたかのように記す。その中に千葉一族の者達の名が記される。こうした改変により、常胤を筆頭とする千葉一族の屋島合戦や壇ノ浦合戦での活躍が期待されることになる。しかし、千葉一族は、『平家物語』では愚味な大將軍とされる範頼麾下の兵であり、特筆すべき活躍は『平家物語』にも記されない。また、闘諍録編者にもそうした話の手持ちはなかったものと考えられる。そうした事情もあって、闘諍録巻八下では、屋島合戦や壇ノ浦合戦での常胤一族の活躍を仄めかす形で物語全体の幕を閉じようとするのではなからうか。

注

- (1) 拙稿「源平闘諍録」の巻立てと構成」(名古屋学院大学論集(人文・自然科学篇)一九一、一九八二・9)
- (2) 福田安典「武田科学振興財団杏雨亭屋敷『今大路家諸目録』について―伽の医師の蔵書―」(芸能史研究二一九、一九九五・4)
- (3) 高橋伸幸「平家物語卷一の構造」(学鵬(國學院大学中世文学研究会)一、一九六七・2)
- (4) 注1の拙稿に同じ。
- (5) 渥美かをる「『源平闘諍録』における源氏関係記事増補の意図について」

- (6) 次論で、具体的に論じた。拙稿「源平闘諍録全釈(三)巻一上③(五ウ5)六ウ9」(名古屋学院大学研究年報二〇、二〇〇七・12)。六〇七頁。
- (7) 拙稿「源平闘諍録」の頼朝拳兵譚について」(名古屋学院大学研究年報1、一九八八・12)

- (8) 渥美かをる「源平闘諍録」における源氏関係記事増補の意図について」(国文研究三、一九七四・3。『軍記物語と説話』笠間書院一九七九・5再録一〇四頁)。

拙稿「源平闘諍録全釈(二)巻一上②(四オ8―五ウ5)」(名古屋学院大学研究年報一九二〇〇六・12)。一四〇―一五頁。但し、巻一上の記事は、余白部分に書き込まれた補入記事で、字体が異なることから、後人の追記の可能性がある(二一〇―二二頁)。ただ、その追記記事とは、脱落に気付いた後人により補われた可能性も考えられよう。

- (9) 拙稿。「平家物語」と東国―源平闘諍録と延慶本をめぐって―」(あなたが読む平家物語1『平家物語の成立』有精堂出版一九九三・11)

- (10) 拙稿。「源平闘諍録」の創作方法のあり方について―巻八上を中心として―」(名古屋学院大学論集(人文・自然科学篇)一八一、一九八一・10)

- (11) 拙稿。「源平闘諍録に見える南都本本文について」(『日本文学史論―島津忠天先生古稀記念論集―』世界思想社一九九七・9)

- (12) 拙稿。「源平闘諍録」の説話受容の方法―谷合戦話における―」(名古屋学院大学国語国文学五三、一九八三・11)

- (13) 闘諍録に見られる特異な景時像の先行研究として、真野須美子の研究がある。「源平闘諍録」の研究―梶原景時を中心に―」(青山語文一五、一九八五・3)

- (14) 『全注釈源平闘諍録』(講談社学術文庫)では、当該記事について、「ここを得られる印象は、翌年正月の「逆櫓論争」で知られるような、義経の敵役としての景時とは全く異質であろう。本書の景時像は他の平家と比べて温かい」(下―一五三七―一五三八頁)と評する。

(15) 拙稿。「源平鬪諍録考―巻立てから見た巻八下の読みについて―」(中世文学三二、一九八六・五)

(16) 注15の拙稿。

(17) 『源平鬪諍録』の志向(平成19～21年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書『源平鬪諍録』を基軸とした古代中世東国をめぐる軍記文学の基礎的研究』二〇一〇・3)

(本稿は、二〇一〇年度名古屋学院大学研究奨励金による成果の一つである)